



郷 土 ち が さ き

第163号

発行 令和7年5月1日
発行者 茅ヶ崎郷土会
会長 平野文明
編集 平野文明

大岡越前守忠相日記について	野田 穂	2
風(自由投稿欄)	○家族と歩くロンドン川村美子	7 ○想
い出の秦野を訪ねて齋藤和夫	9 ○短歌ふるさと藤間克子	1
○歴史を語る地域の宝物名取龍彦	14 ○こんなシン盆踊り	13
どうでしよう!長谷川由美	16	
東海道を歩く③報告(山本 染谷)	河村城址報告(平野 井出)	

新年度が始まり、新しい一年生が出現しました。ことに小学校の一年生はインパクトがあります。新品の黄色い帽子をかぶつた彼らを見ると笑みが浮かびます。自分にも一年生になつた時があつたんだなあと、清く、正しく、豊かなココロになるのです。この時期だけですが。

入学した小学校は御岳小学校といいます。野尻という集落から学校まで三段ほどだつたでしょうか。一年生には遠い道でした。ここから私と荒牧安っシャンと甲斐ヒロコちゃんが一年生になりました。

野尻にはガソリン販売所がありました。移動式でハンドルを回す給油機のほかにドラム缶にも入れてあり、ゴムホースを口にくわえ、強く吸つて素早く自動車のタンクに入れる大人もいました。車はめつたに来ないので私たちの遊び場でした。あるとき、安っシャンがまねをしました。そしてごくりと飲み込みました。町で映画を見るのが一番の楽しみでした。ヒロコちゃんの弟のチカラちゃんはチャンバラを見て帰つてから、その下の妹を「おくみ殿」と呼んでいました。安っシャンもヒロコちゃんもチカラちゃんもおくみ殿もどうしているかなあ。

(茅ヶ崎郷土会々長 平野文明)

「大岡越前守忠相日記」について

「大岡越前守忠相日記」（以下略「大岡日記」）は、大岡忠相が寺社奉行になつた翌年の元文二（1737）年元日から、亡くなる半年前の寛延四（宝暦元・1751）年閏六月八日までの公的な生活を記録した日記です。原本は、自筆本と筆写本（右筆＝武家の文書係）が清書したとされるもの）の二種類あり、十四年七か月（180か月）分の内、自筆本は三割、筆写本は六割残っています。昭

大岡越前守忠相日記 残存状況

元号	西暦	月数	筆写本 残存冊数	自筆本 残存冊数	
元文2	1737	13	13	0	
元文3	1738	12	12	4	
元文4	1739	12	0	0	
元文5	1740	13	11	11	
寛保元	1741	12	0	0	
寛保2	1742	12	12	0	
寛保3	1743	13	0	13	
寛保4・延享元	1744	12	11	0	
延享2	1745	13	12	3	
延享3	1746	12	0	0	
延享4	1747	12	12	9	
延享5・寛延元	1748	13	13	7	
寛延2	1749	12	12	0	
寛延3	1750	12	0	10	
寛延4・宝暦元 閏6月まで	1751	7	7	2	
合計		180	115	59	174 冊
			64%	33%	

野田 穂

和四十三（1968）年度以来、その全一七四冊が、東京都立川市の国文学研究資料館に寄託されています。

約五十年前に出版された大岡日記の活字本は、上・中・下巻の三巻あり、茅ヶ崎市立図書館などで閲覧することができます。江戸時代にくずし字で書かれた日記を読み解くことは困難なので、活字本を手掛かりに、大岡忠相の家族や茅ヶ崎・神奈川近隣に関する記述、その他個人的に興味を引いた部分を下巻の索引から抜き出し、郷土会の先輩の助けをお借りしながら、古文書と歴史の素人が現代語への意訳を試みたいと思います。

今回は、忠相の実母、実兄の孫（大甥）、將軍代替わり四日後の江戸城について、記載がある日の記録を読んでみました。

いまの言葉で 『大岡越前守忠相日記』を読んでみた！

延享二（1745）年十一月六日
天氣良し 一〇時過ぎから北風吹く、夕方四時に止む

【定例会 延期】

① 八時 衣冠^{*1}で、自宅から江戸城西の丸^{*2}へ出勤。駕籠の両脇の者にも袴（かみしも）を着るように言った。

② 一〇時 将軍家重様（九代・三五歳）が、紅葉山^{*3}への墓参りが済み、西の丸へ戻られたところで、大御所の吉宗様（家重の実父・八代将軍・六二歳）が鉢箱（はさみばこ）^{*4}を持った従者たちと出発すると連絡があり、礼装した行列で行くので、みんなで連絡し合つて玄関にまわった。二一人いるはずなのに欠勤が多く、八人しかいなかつた。

③ しばらくすると、玄関から轍の輿（ながえのこし）^{*5}で出られて、右に自分（六九歳）、左に石川内膳正（二七歳）^{*6}が立ち、あとは名前順に並んで行列にお供した。河野豊前守（河野通喬・五二歳？）もお供し、西の丸裏門^{*7}を通つて紅葉山に参詣した。石段の下に集まつてひれ伏し、本丸大広間の車寄せから、まず吉宗様が、続いて大納言の家治様（家重の長男・九歳）^{*8}が駕籠で出られた。大紋行列^{*9}が紅葉山参りに行列で向かい、石段の下でひれ伏し、吉宗様と家治様はすぐに戻った。行列が通つた時と同様に玄関前でひれ伏し、家治様も戻つた。この時、二時の太鼓が鳴つた。

④ これらが済んで玄関前から直帰した。

⑤ 今日は実母^{*10}の三十三回忌なので、大岡吉次郎（二〇代？）^{*11}の家から谷中の瑞輪寺で法事を行うとあり、私たちもと言わされたので、一四時に熨斗目半袴^{*12}を着て、駕籠の

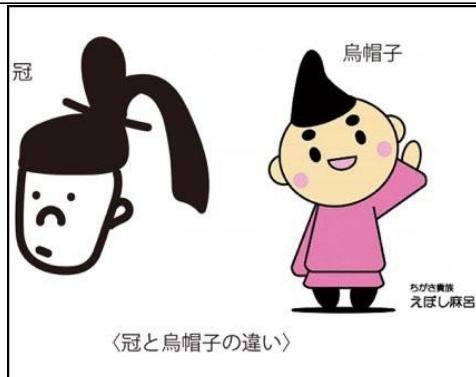
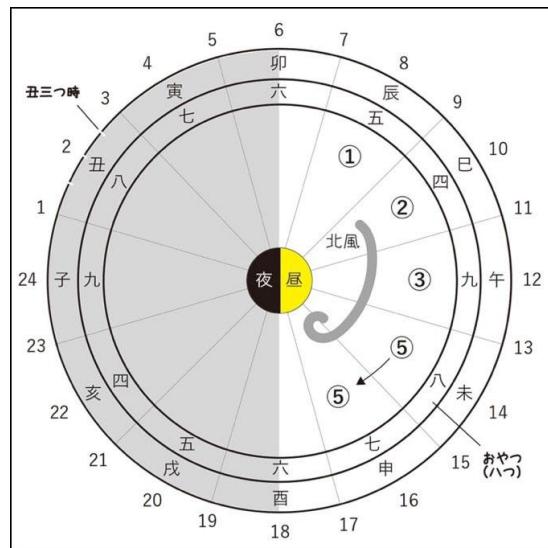
両脇の者にも袴（かみしも）を着させて家を出た。瑞輪寺で墓参りをして一七時前に帰宅。

⑥ 今日のお三方の紅葉山参詣では、将軍家重様の行列には「東帶」^{*13}で本多紀伊守正珍（寺社奉行）が、大御所の吉宗様の行列には「衣冠」^{*13}で自分（寺社奉行）が、大納言の家治様の行列には「大紋」^{*13}で山名因幡守豊就（寺社奉行）が、本丸当番と詰番は松平、主計頭武元（かずえのかみ・寺社奉行）が勤めた。

⑦ 主計頭から手紙。明日七日、上野増上寺^{*14}に一条殿と二条殿と長谷三位^{*15}が参詣するのにあたり、増上寺へは自分、寛永寺には因幡守が詰めることになったので、明日七日の定例会は、また延期に。これについて中務殿（本多中務大輔忠良・老中）も行かれるとのことで、石河土佐守からの文書の内容は次の通り。
 《増上寺へ長沢壱岐守と畠山飛驒守、織田主計頭、大岡越前守が行つて、文昭院様（六代将軍・家宣）と有章院様（七代将軍・家継）両方の靈廟へ、両公（一条殿と二条殿）が参詣する。また、明日寛永寺と増上寺に出勤の役人についても書かれていたが略す。両寺の警護などについての文書の写しも来たが併せて略す。》

⑧ 一条殿と二条殿と長谷三位は、明朝七時に出発して、まず寛永寺を参詣してから、増上寺に参詣する予定。寛永寺には目付の横田十郎兵衛、増上寺には土屋長三郎が行く。宿坊についての文書も主計頭から来て、増上寺の子院で、一条殿は「月界院」、二

条殿は「良源院」、長谷三位は「慶渡院」とのこと。(江戸時代、芝増上寺には二五万坪の境内に四八の子院があつた)



【大岡日記 原文】

内寄合延 六日 吉 四時過方北風吹 七時止

①一 五時 衣冠太刀帶出宅西丸江登城、駕籠脇兩人上下着させ申候

②一 四時 公方様紅葉山御社参相済還御被遊候由御注進有之、大御所様御鉢箱出候付衣冠行列罷出候面申合御玄関前江相廻、右十二人有之筈之所断多八人而相勤候

③一 無程御玄関より御轍而出御被遊、御右の方自分御左の方石川内膳正立、それより名順之通り行列相立供奉仕候、河野豊前守相添御轍門通紅葉山御社参、上之御石段三留り平伏仕候、大御所様出御御引続大納言様大広間御駕籠台より御駕籠而出御被遊、大紋行列紅葉山御社参行列下之段三留り平伏 御一方様即刻還御被遊、行列御成之節之通御玄関前留り平伏、御統被遊大納言様還御付右之所三而平伏仕候、此節御太鼓之九ツ打申候

④一 右済御玄関前より退散帰宅

⑤一 今日栄樹院殿三十三回御忌付て大岡吉次郎方谷中瑞林寺三而法事執行有之、我等方も付法事執行申付候、右付八時熨斗目半袴駕籠脇兩人上下着用致せ出宅、瑞林寺江参詣七半時前帰宅

⑥一 今日御二ヶ所様紅葉山御宮御参詣、公方様行列三八束帶三而紀伊守被勤、大御所様行列三者衣冠三而自分相勤、大納言様行列三者大紋三而因幡守勤、御本丸当番詰番共主計頭被勤候

⑦一 主計頭より手紙、明七日上野増上寺江一条殿二条殿長谷三位参詣付、増上寺江自分、上野江因幡守被詰候付、明七日之内寄合相延候由申来、右付中務殿御渡候由石河土佐守被差越候御書付一通被差越之由左之通

増上寺江長沢壹岐守畠山飛騨守織田主計頭大岡越前守、文昭院様有章院様兩御靈屋江兩公参詣と相見申候、其外上野増上寺勤番御役人付御書付有之候得共略之并上野増上寺固等之義付御書付写來候得とも略之

⑧ 一条殿・二条殿長谷三位明朝六半時出門上野江参詣、夫より増上寺江参詣之筈之由、上野江ハ御目付横田十郎兵衛、増上寺江ハ土屋長三郎被参候、両公宿坊も書付來、増上寺にて一条殿宿坊月海院、二条殿宿坊良源院、長谷三位宿坊者慶渡院之由主計頭ら申来候

〈補足・補註〉

・西暦は元号に対応。日付は旧暦。年齢は数え年。

・この日記が書かれた四日前（一月一日、天気は曇）に將軍宣下（朝廷から勅使が来て、征夷大将軍に任命される儀式）が行われました。吉宗から家重への代替わり直後に、忠相が官僚としてどう動いていたかが記録されています。

*1 衣冠・冠を被り帯刀した礼装

*2 江戸城西の丸・将軍を退いた大御所や世継ぎが生活していた御殿

*3 紅葉山・歴代将軍の靈廟があつた江戸城内の小山

*4 錔箱・荷物入れ、カバン

*5 輶の輿・お神輿の形式の乗り物

*6 石川内膳正・石川總候、常陸下館藩主。大岡日記注記には桜川市
の常陸国眞壁城主と記載

*7 西の丸裏門・坂下門の内側にあつた門。移築されたものが今の乾
門

門

*8 家治様・家重の長男。大河「ぐらぼう」では眞島秀和さん演

*9 大紋行列・譜代大名・老中・若年寄が大紋、直垂、鳥帽子を着用

*10 実母・栄樹院妙泉日行大巳のこと。忠相の実母・栄樹院（正徳三年一一月六日没）は北条氏重の娘で、当時墓所は谷中の瑞輪寺にあつたことが大岡家の過去帳でも確認できますが現存しません。



寺務所に問い合わせても不明。茅ヶ崎市高田の本在寺に、栄樹院の
名が刻まれた供養塔があります。
(写真・向かって右の塔、栄樹院ほか大岡家供養塔 2024年9月筆者
撮影)

【参考資料】

*11 大岡吉次郎・高田村の領主の忠移（ただより）。高田村の大岡家は忠相の実家。忠移は忠相の実父（忠高）のひ孫に当たる。

*12 稔斗目半袴・スーツ的な服装
*13 束帶、衣冠、大紋・それぞれ礼装の種類
*14 上野増上寺・上野寛永寺
（上野増上寺の）と

*15 一条殿と二条殿と長谷三位・公家上位の三人。一条家と二条家は藤原氏本家の筋の攝家格の二家。ながたに家は名家格

- 「史料群概要 三河国額田郡西大平大岡家文書」／国文学研究資料館 <https://archives.nii.ac.jp/siryo/ac1968304.html>
- 「大岡越前守忠相日記」上・中・下巻 大岡家文書刊行会編纂／三一書房 1972-1975年
- 「ちがさきと大岡越前守」茅ヶ崎市史ブックレット12／茅ヶ崎市史編集委員会 2010年

- 「大岡越前守」伊藤脩平／日本放送出版協会 1967年初版
- 「紅葉山御城御靈廟総縦図」／東京都立大学図書館
<https://www.lib.tmu.ac.jp/mirami-osawa/collection/mizuno-key/picture/1988/1993.html>
- 産経新聞記事 (2024.11.23)
<https://www.sankei.com/article/20241123-SML3NRSVXWM7ZKQ27R63CMXKTU/>
- 東京都立図書館
<https://archive.library.metro.tokyo.lg.jp/da/detail?tilcod=00000002-000006625>
- 大江戸歴史散歩の旅～
<https://wakoo226.exblog.jp/21236464/>
- 駿河田 萌黄平綱地格子模様 柚梗紋付 | 文化遺産大百科
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/553410>
- 「寛政重修諸家譜」第7~新訂 堀田正敏等編／続群書類從宗成
〔1~6巻〕 (国立国会図書館) ダウンロード
- 防火と消火 - 上野原市寺町名井櫻桃灯等雑形 - 国立公文
館
<https://www.archives.go.jp/exhibition/digital/tenkataien/fire/contents/42/index.html#:~:text>
- 大本山増上寺
<https://www.zojoji.or.jp/info/history.html>
- トランプ火消の歴史総合史記録 十数ある郷土図書／古文書やハム
<https://komonjyo.net/kodomaihimoikozusyou.html>
- メモリ解説講座 4／静岡県立中央図書館
<https://www.tosyokan.pref.shizuoka.jp/data/open/cnt/3/59/1/kz04.pdf>

- 茅ヶ崎ゆかりの人物館「大岡アボ」報告書／加藤幹雄 2024年

輪読会余談 《高座丘陵》

2025年3月4日の茅ヶ崎市史4輪読会に参加した際に知った「高座丘陵」が気になつたので少し調べてみました。

神奈川県には、相模原市から藤沢市にかけて、相模野台地（相模原台地とも）といつ大きな台地が広がっています。その南端の、相模野台地とは由来が異なる「高座台地」（高座丘陵とも）の上に、茅ヶ崎市香川・甘沼・赤羽根以北の小田地区はおつねす。大岡忠政（大岡忠相の4代前の祖先）は徳川家康に伴つて関東に移り知行地を与えられて堤村の高台に陣屋を構えました。つまり、「バラタヤリ的」といふ「大岡陣屋は高座台地のくりにあつた」といふのです。

【参考資料】

- 相模野台地上に分布する古墳墓群の出土堆積物／神奈川博調査研究 (田然) 2021, (16), 125-136. https://nh.kanagawa-museum.jp/www/contents/1612424247437/simple/chouken16_125_136ka_wajiri.pdf
- 茅ヶ崎市地形及び地質の状況／茅ヶ崎市 2023年3月31日
<https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/bosai/1001267/1001270.html>



優れたバレーダンサーやバレリーナが育ち、日本中に拡がり、今はなんと多くの日本人のバレエダンサー、バレリーナが国際的に活躍なさっています。この

家族と歩く春の街。コベントガーデンのロイヤルオペラハウスにバレエを観に行きました。オペラハウスでは、日本人プリンシパル（トップダンサー）を中心に、堂々とした優雅な踊りに魅了されました。その帰り道、昔、エリアナ・パブロバさんが、七里ヶ浜にバレエ学校を開いたのを思い出しました。そこから、茅ヶ崎出身の歌手尾崎紀世彦さんのお父様、藤田（尾崎）繁さんが日本人第一号のバレエダンサーになり、その後、

やはり湘南地方は文化、芸術などの重要な拠点なのだと確認します。

コベントガーデンは、また大道芸の聖地としても有名です。観衆を引き込み、その目を釘付にしてるチャツプリンのような手品師と出会い、時々足を運びますが、私達が行くとともに喜んでくれます。他の大道芸人達も幸せそうにこの広場に溶け込み、近くにあるカフェテラスも、彼等のパフォーマンスの舞台装置の様に見えます。

川村美子（ロンドン在住）

家族と歩く春の街 ロンドン コベントガーデン

風
自由投稿欄



Bunを真横に半分に切り、トーストし、バターをつけていただきます。日本でも売っていますね。

ロンドン中心部のセントジェームズパークのすぐそばにあります。この文章を書いているのは三月です。

が、花壇には黄色のラッパ水仙をはじめいろんな花やアーモンド、プラムなどが咲き誇り、春の訪れを告げています。



セントジェームズパーク

ウインドウデコレーションで有名なデパートも黄色が目立ち、華やぎ眩しいです。こちらは、イースターのお祝いを大にし、ひよこの形のイースターエッグなどをプレゼントしあい、ローストラムがゴ馳走です。

さあ明るい日差しを浴びながら、ピカデリーサーカスを通り、コベントガーデンまで散歩しましよう！ そう、ロンドンの中心部は歩いて廻れる所が多いですよ。歩くのが健康法と言われ、郷土会の皆様を見習い、歩こう、歩こう、私は元気

散歩の途中で見た
ウェストミンスター宮殿の時計塔
(ビッグベン)

実は、ロンドンに永住し四十一年たちますが、今まで知らないなかった事も多くの原稿を書かせていただきました。事により、英国の良さや日本との繋がりを再確認し、また新発見もあり、誠に感謝しております。皆様のご健康をお祈り申し上げます。



デパートのウインドウ

Sunshine at Teatime
Mango & Yuzu
#FORTNUMTEA
FORTNUM & MASON

(画像は筆者提供)

【補注】—ウキペディアから引用—
【編集子】
コヴェント・ガーデン(Covent Garden)は、ロンドン中心部シティ・オブ・ウェストミンスターの中に存在する地区。商店や娯楽施設が立ち並び、人々で賑やかな場所である。長い歴史を持つが、1980年に大改装を受け観光客を対象としたショッピングセンターへと生まれ変わった。ロイヤルオペラハウスをコヴェント・ガーデンと呼ぶことがある。

幾とせらひと来てみれば
想いでの秦野を訪ねて

ロイヤル・オペラ・ハウス(Royal Opera House)はコヴェント・ガーデンにある歌劇場。ロイヤル・オペラ、ロイヤル・バレエ団そしてロイヤル・オペラ・ハウス・オーケストラの本拠地として使用されている。合計約2千人の聴衆を収容できる4階建ての円形観客席を有し、観客席部分はイギリスの指定建造物となっている。セント・ジョームズ・パーク(St James's Park)ロンドン中央部にある23ヘクタールの公園。ビッグ・ベンロンドンのウェストミンスター宮殿に付属する時計塔。

齋藤和夫

はだの歴史博物館

(平成二十二年四月三〇日 神奈川県秦野市堀山下三八

○一三)

「秦野市立桜土手古墳展示館」は平成二年にリニューアルして「はだの歴史博物館」となりました。

現地は小田急線渋沢駅から徒歩二〇分、丹沢山地を望む古墳公園内にあります。園内には博物館の他に数基の復元古墳があり、近くの保育園児たちも来ていました。館内には常設の、古墳時代

昨年暮れの県のたよりに、神奈川の遺跡展（かながわ縄文中期の輝き）が「はだの歴史博物館」で展示されるという記事が掲載され、同館の名前が紹介されました。嘗て暮らした彼の地を久しぶりに逍遙してみる気になりました。



から平安・江戸・現代に至るまでの歴史、文化などが展示されています。

今回の遺跡展として秦野・寒川・厚木・海老名・相模原・横浜・川崎・横須賀など県内各地の出土品や、また、ムラの堅穴住居跡、環状集落の発掘現場が展示されていました。縄文中期は集落や住居が多くなり、社会的にも繁栄していました。

偶・装飾品もありました。

旧秦野—宮間軽便鉄道駅跡

秦野地区は、江戸時代の富士山宝永噴火の影響で主要作物は葉たばこ・落花生・織物などで、市内には葉たばこの専売局工場もありました。当時の産物の輸送先は平塚より二宮の方が距離的に近いので、明治三十九年に馬車鉄道として設立、その後蒸気運転の軽便鉄道として輸送量も増加していきました。しかし昭和二年

秦野市入船町一二二二となつていて、近くには秦野駅跡の標示板のみが残っています。その表示板の説明文は次のとおりでした。
(現物は横書き)

一五七一〇〇四一
神奈川県

軽便鉄道は市街地中心部にありました
が、葉たばこ栽培の終了に伴い、
専売局工場も廃止されて、
現在、工場跡はイオンシヨツピングセンター(〒

の小田急線の開通により
旅客、貨物とも減少して
経営不振に陥り、昭和十
二年に廃線となつていま



馬車鉄道・軽便鉄道・湘南軌道の沿革 秦野駅
通称「軽便」は、明治39（1906）年に湘南馬車鉄道株式会社が秦野町（現在、秦野市 本町三丁目）～吾妻村（現在、二宮町二宮）間の道路9.6キロメートルに幅一尺五寸（76.2センチメートル）の軌道を敷設した馬車鉄道の運行が始まりとなっています。

が譲渡されています。当時の沿線は、草葺屋根の民家がほとんどで、火の粉の飛散を防ぐため、独自に開発したラツキヨウ型煙突を付けた機関車が、客車や貨車を牽引していました。旅客は秦野地方専売局の職員や大山への参拝者で、貨物は葉たばこ、たばこ製品、木材、綿糸などで秦野の産業発展に大きな役割を果しました。

この地付近には、大正10（1921）年からの軌道延長工事により、台町駅にあつた秦野駅が移されています。大正12（1923）年には専売局の構内に煙草類積降専用ホームが設けられ、引込み線の接続がされています。秦野には、このほか台町駅、大竹駅がありました。

大正10（1921）年には、秦野自動車株式会社が秦野～二宮間の営業を開始し、大正12（1923）年の関東大震災による軌道の損害、昭和2（1927）年の小田急開通などにより鉄道経営が厳しくなり、昭和8（1933）年に旅客運輸を、昭和10（1935）年は軌道全線の営業を休止し、昭和12（1937）年に軌道運輸事業を廃止しています。

明治、大正、昭和の時代を走り抜けた「けいべん」の想い出は人々の胸の中に生き残っています。

秦野市市制50周年記念事業「軽便鉄道歴史継承事業」
秦野市 平成17（2005）年9月

軽便鉄道の路線はほぼ現在の二宮県道に沿つていて、中井町の井ノ口を経由して二宮駅北口に達していました。駅跡は秦野駅と同じく表示板のみが残っています。

それまでは軽便秦野駅は「秦野駅」と名乗っていましたが、小田急線の開通により小田急線の新駅は少し離れていて、区別するために「大秦野駅」となりました。さらに、昭和六十二年は現在の「秦野駅」に改称されています。

秦野水道発祥の地公園（曾屋水道記念公園 神奈川県秦野市水神町九一三）

旧称は曾屋配水場といいました。秦野市のホームページに「明治二十三年から給水を開始した曾屋配水場は一九八三年にその役割を終え、一九九〇年には公園として整備して、現在は市民へ開放しています。現在でも配水池

やポンプ室の遺構が残されており、その歴史を感じることができます。」と書いてあります。

秦野は地形が盆地で、降った雨は地下に浸透して地下水となり、水質は極めて良好です。市内を流れる水無川はその名の通り丹沢山地を源流とする伏流水で、普段の水量はわずかですが、下流の金目川や花水川になると水量も増えて相模湾に注いでいます。



終わりに

市内の一帯を巡つて、古代より中世・近代に至る先人たちが培つてきた地域の生活の営みの一端を感じました。また、三〇〇年にわたる葉たばこ耕作の終焉により、たばこ畑は工業団地に変貌し、多くの企業が進出して活況を呈しています。

さらに、往年の先輩たちの偉業を偲んで毎年九月下旬には秦野たばこ祭が行われ、多くの観客で賑わっています。

うぶな縁に情けの露が

濡れて愛しやエーなんとしょ たばこ苗

ソレ はだの景たばこ畑つくり

ハー見てくれはだのの働き手

(秦野タバコ音頭の一節)

昭和二十三年から中学時代を過ぎたわずか三年半をふるさとと呼ぶにはいささか大仰ですが、青春思春期のほろ苦い想い出となっています。

(画像は筆者提供)

【本文執筆で参考にした図書】

『縄文ムラの繁栄 かながわ縄文中期の耀き』神奈川県教育委員会
一〇一四
『かながわ鉄道廃線紀行』森川天喜著 神奈川新聞社 二〇一四
『秦野ふるさとめぐり』 秦野市教育研究所 二〇一七

茅ヶ崎郷土会へ入会のお誘い

活動

- 史跡や文化財・歴史を訪ねて各地の歴史探訪
- 茅ヶ崎郷土史や民俗の学習会
- 各地に訪ねた名所旧跡の写真展

会報『郷土ちがさき』年3回発行 会員の発表の場です

- 調査・研究の掲載
- エッセイ・短歌・俳句・探訪記・提案・思い・図書紹介などなどの投稿
- 事業予定、事業報告など

会員約70人 年会費1,500円 入会金 なし

入会

入会するときは、

- 申込日 ○氏名 ○連絡先(住所・電話・male addressなど)を書面にして出してください。

短歌七首

ふるさと

藤間克子

著蓑の花縮荷の裏に笑く頃か老いの身となりふるよ
と訪えず

ふるさとの田園は住宅地となりて田螺は疾うに住
み失う

我老いて故里の小川をなつかしも泥鰌捕いつ蛭に刺
され

亡夫が植えしソメイヨシノの花仰ぐ「満開だねー」花
陰より声

桜散り田起こし前の田に降りて穴にひそみし田螺
を搜しぬ

煙るごと枝垂れ柳の芽吹きしを夫在れば共に仰が
んものを

終戦前後食べ物不足を補いて田螺は大事な栄養源

たり

新暦短歌会々員

歴史を語る地域の宝物

名取龍彦

「もの」に語らせる

現在は「もの」の映像が欲しいと思ったら、パソコンやスマートフォンで検索し、瞬時に必要な「もの」の映像を入手することができます。画面に映し出された映像はひとつだけではなく、たくさんの違ったものを見ることができます。実在する「もの」もありますが、画面上だけの、手に取ることの出来ない架空のものもあります。バーチャルの世界、AIによる創造物・・・。

ただひとつ、現実に存在する「もの」の歴史を大切にしたいです。そのものがどこかで生まれ、人と関わった歴史、他のものと関わった歴史。もの自身は言葉を発しませんが、ものと出会った人が、ものの発する言葉を想像することはできます。ものに語つてもらうには、やはり実物、本物がよいです。

小出小学校民俗資料室

図1 農具の展示エリア
図2 生活用品の展示エリア

今年三月に小出小学校の民俗資料室を訪問しました(図1、図2)。資料室整備のお手伝いをされている鴨志田聰さんから養蚕・製糸関係の資料があるので見て欲しいとの依頼がきました。私が茅ヶ崎純水館研究会員だからです。鴨志田さんは協力者として校舎の大規模改修工事後の民俗資料室リニューアルを支援なさ

っている元小出小学校の先生です。かつて小出村や茅ヶ崎町を含む高座郡は養蚕業がとても盛んでした。明治三十一(一八九九)年には小出村芹沢に平本製糸場が設立されます。純水館茅ヶ崎製糸所が茅ヶ崎駅前に開業したのは大正六(一九一七)年です。展示室になった教室には数多くの民俗資料が並び、入室してすぐに入り口の扉を開けたときに、そこには何が詰まっているのか、様々な人たちの思いが詰まった空間だと感じました。資料室



図1 農具の展示エリア



図2 生活用品の展示エリア

づくりのきっかけになった一枚のお知らせ文を鶴志田さんから見せていただき、やはり地域の方々の思いが結集した場所だと得心しました。お知らせ文の一部を紹介します。昭和五十七（一九八二）年十月三十日に小出小学校長名、小出小学校PTA会長名で出された「民俗資料収集についてのお願い」です。

このたび、われわれの父母、あるいは先代の方々が從来使用してまいりました古い生活用品、道具類、農機具等の民俗資料を収集いたしたいと存じております。

この件につきましては、PTA運営委員会でもお願ひし、過日のPTA研修の節にも、民俗資料収集校の相模原市立田名小学校を会員の皆さんまと参観いたしました。

この小出地区も年々都市化がすすみ、むかしの生活を伝える道具類が殆んど散逸していると思われます。わたくしたちの生活文化がどのように変わってきたかを今後のこどもたちに伝えることは、極めて意義のあることと考えますので、皆さまの家の物置その他に残っている生活用品で、ご不要の品がございましたら学校へご寄贈いただければ大変ありがたいと存じます。

今年は戦後八十年。世界では現在も戦争が行なわれています。展示品の中から戦争を考える資料になる秀逸な資料二点を紹介します。

一点目（図3） 土の羽釜（はがま） 羽釜に入っていた展示解説文から

「戦争中、武器をつくる鉄などの資源が足りなくなり、家庭で使っていたなべややかんなどの金属製品を国にさし出すことになりました。ごはんをたく羽釜もさし出したため、土の羽釜が

代用品として使われました」（漢字には読み仮名が振っています）

二点目（図4） 鉄塔を貫通した弾丸の痕



図3 土の羽釜

展示室の南側に鉄塔が見えます。図4は、現在の鉄塔を作る前に取り壊された鉄塔に残っていた弾丸の痕です。貫通した穴は鉄が溶けたように見えます。戦時中、小出小学校の校庭に地域の方々が集まっていたときに米軍の戦闘機から機銃掃射がありました。鉄塔に弾丸が当たつていなかつたら被害がもつと広がっていたらどうと伝えられています。歴史をもの語る遺物です。

鉄塔を建て替える時に、地元の方が鉄塔の一部を譲り受け、台座をつけて歴史を伝える資料として小出小学校に寄贈しました。鉄くずになつてどこかへ運ばれていたら、弾痕の強烈な印象が伝わる穴が現在に残ることはありませんでした。遠い場所の歴史ではなく、自分たちが生活している場所で起きた事実の資料だからこそ、ものが語る言葉数が多いのです。その言葉に耳をかたむけることが大切だと思います。



図4 弾孔の跡

二点とも地域の方々の思いが詰まつた貴重な資料です。この資料をはじめ多くの民俗資料が学校内にあり、実物を見ることができる小出小学校の児童は幸せだと思います。

棄てればゴミ、活かせば宝物

私は蚕糸業（蚕種業、養蚕業、製糸業）に関する資料を数多く所蔵しています。紙ベースの資料もありますが民俗資料も多いです。私の所蔵資料は家族から「ゴミクション」と呼ばれています。「ゴミ」「コレクション」「オークション」から作られた造語で

こんなシン・盆踊りどうでしょう

長谷川由美

前号（会報二六二号二〇二五年一月発行）では、昨年秋から受講をしていた「障がいのある人と考える舞台芸術講座」企画実践編の視察研修（神戸市長田区DANCE BOX等について）レポートをしました。この講座は、文化庁の障害者等による文化芸術活動推進事業で、委託を受けた一般社団法人が主催したものです。講座の総まとめである「企画発表会」が一月末に開催され、全国各地からの受講者一人名が四グループに分かれ発表しましたので、今号で私が参加したDグループの企画を紹介します。まず、私たちDグループは五人。次のとおり多種多様なメンバーでした。

す。娘が命名しました。資料の入手方法は、頂き物、田舎（長野県）で行きつけだった骨董屋さん（数年前に店仕舞いしてしまった！）とヤフーオークションからの購入品です。私の手元に集まつた資料は、ゴミにならずに、第二の人生（物生？）を歩んでいます。これからも「もの」が発することばを聞き、私の言葉で発信を続けたいと思います。五感を使って「もの」に接する機会をたくさん提供できればと考えています。

（画像は筆者提供）

- 1 劇場職員で事業制作の担当者／横浜市
- 2 福祉職員兼アートサポートセンター（都道府県単位で設置された障害者による文化芸術活動のサポートをする機関）のコーディーネーター／山形市
- 3 福祉事業所の生活支援員であり、即興演劇を教育現場、精神障害ディケア、高齢者施設などで展開する役者／神戸市
- 4 吃音の当事者であり、演劇活動を行い大学院でマイノリティの当事者が表現活動を行うことについて研究している学生。役者／大阪市

5 市議会議員で、市民活動として地域の文化芸術活動、演劇活動に参加する役者／茅ヶ崎市

このように全国各地に散ったメンバーですので、日常的なミーティングと基礎講座はインターネットを利用したオンラインで行い、その上で、神戸市、浜松市等、舞台芸術への障害者の参画を進めている活動団体へ現地視察研修をしました。

★ 提出した企画案「みんなでつくるシン・盆踊り」

Dグループでは、地域のつながりが希薄になっていること、障害のある人との人が共に参加できる場は思いのほか少ないと、さらに、障害の認定は受けていなくても、ずっと立っているのは辛い・見えにくい・聞こえにくい・対人関係が苦手といったグレーゾーンの人もふらつと立ち寄ることもでき、いつもは一緒には辛い・見えにくい・聞こえにくい・対人関係が苦手といったグレーゾーンの人もふらつと立ち寄ることもでき、その中でコミュニケーションティが生まれていくこと、を目指した「盆踊り」の企画を組み立てました。

この企画は一つの活動の流れで構成しました。どちらも障害がある人にも参加していただくことが前提です。

一つは、まちの風土を生かし、取り入れる創作活動として、新しい「盆踊り」をつくるワークショップを開く。そして盆踊り大会で発表し、みんなで踊るというもの。指先、手先だけ、上半身、下半身だけでも参加できるよう組み合わせることを基本とします。

もう一つは、昔からある盆踊り大会をより親しみやすいものにするために、スタッフを募り、障害がある人への対応を学びながら

ら、障害を持つ当事者へのヒアリングを行なう。だれもが参加でき、参加しやすい場としてつくりあげること。

ミーティングを重ねるうちに、なんと、茅ヶ崎市うみかぜテラスが会場としてふさわしいということで仮想会場になりました。

理由は、公共施設で、福祉と教育の複合施設であること、建物がバリアフリーであること、広い駐車場が隣接しており、身体的障害のある人や福祉施設などからもアクセスしやすいこと。また、海岸に近く、風土を取り入れるフィールドワークとして浜に出ることが可能のこと。浜辺は、潮風の匂い、波の音、砂を踏む感覚、海の景色など、感覚的にその特徴を感じることができる場所です。また歴史探訪のポイントである国木田独歩の碑、野球場などが近くにあること、などが挙げられました。



画像①
車いすで踊りの輪に入れる
盆踊りの場を想定して
(中央の箱は盆踊りのやぐら)

観覧席に活用でき、ある程度周囲が囲われているため、見守りやすい。地域の人は慣れ親しんでいる場所なので、立ち寄りやすいこともあります。準備段階やワークショップ会場としても使い、継続的に使用することで、いつもと違う環境にはなじみ難いという障害のある人でも、「何回か行った」とある場所になれば、おおぜい



写真②

が集まる盆踊り大会への不安も抑えることができるだらうと考えたのでした。

開催場所を定め、障害をもつ人たちの二〇人近くに「どんな盆踊りなら行ってみたいと思う？」とヒアリングしました。それを踏まえた企画と、皆さんから聞こえてきた意見、希望は次の通りです。

○座ったまま踊れるレーンを中心近くに位置につくる。立つていることは難しいけれど、輪の中で踊る一体感を味わいたい。車椅子、ベビーカーで踊りの輪に入ることができるレーンがあるといい。

○音楽、リズムを体感することができるようヤグラを低くし、スロープで登れるようにする。新しい盆踊りの発表にも使

う。聴覚に障害があつても、太鼓などは身振りでリズムをとつて楽しむことができる

ので太鼓を叩く姿、手元などが見えるよう

にして欲しい。太鼓を叩く体験がしてみたい。クールダウン（次第に落ち着くこと）することのできる静かなスペースを建物の中に設定する。音が鳴り続けている場や、人がたくさんいる場にいるのは辛くなるかもしれないが、遠くに聞こえるような盆踊りを楽しむように参加できるなら安心。

○暑さ対策と、障害者施設から出かけやすくなるために、開催時期は五～六月頃の土

最後に

これらの工夫は障害があるなしに関わらず、だれでも参加やすい場を作るためのヒントになるのではないでしょうか。

「シン盆踊り」は、新しく茅ヶ崎に引っ越してきた人たちや子どもたちにも、まちを知つてもらう機会になります。「え？盆踊りが舞台芸術なの？」と思われる方もあるかと思いますが、先祖へのおもいから始まつた盆踊りを、表現活動のひとつとして見直せば、ちょっと悔れない「あらゆる人が集い、つながる文化活動」に進展させることができただと思いました。

この受講を通して、「舞台芸術と障害のある人」という視点で文化芸術活動に取り組んでいる人たちと出会うことができました。そして、「社会的な障害をとりのぞくこと」が重要で、「文化芸術活動はあらゆる人をつなぐ可能性がある」とことを身をもつて実感しました。今後も全国のお仲間と情報交換をしながら、私の活動に生かしていきたいと思います。

画像① 企画発表会にてスロープで上がるのできるやぐらと、車椅子・ベビーカーでも踊れることを体感するために行った舞台上の立体展示。

画像② プレゼン中聴覚障害のある方から提案された「目でわかる案内版」を首からかけている様子。

(画像は筆者提供)

曜日、一五時～一〇時頃としたい。施設は日曜が休みで、活動時間は昼間の場合多いため。

茅ヶ崎郷土会の事業報告

第三二回 史跡・文化財めぐり

茅ヶ崎市内の東海道を歩く③

山本俊雄

令和六年度の市内めぐり編第一回は六月に行つたが、今回はその三回目になる。残念ながら参加者が少なかつた。しかし、十二月の寒さが気にならないよく晴れた日の歩きだつた。

いつもどおり茅ヶ崎駅改札前八時五〇分までに集合し、私のほかの参加者は、駅からバスで茶屋町バス停まで行き、そこから東海道（国道一号）を南に外れ五〇メートルほど行つたところにある最初の訪問地、金剛院を訪ねた。私はバスの出発前に自転車で先回りしたのだが、途中バスに追い越され、皆さんがバス停で降り、目的地に向かうのを見送ることになった。

① 金剛院 南湖一一一

高野山真言宗 山号は法林山 開山は文覧 天和二年僧朝海の創立

本堂には、文観上人作と伝わる地蔵菩薩・弘法大師像などが祭られている。墨書き等から室町後期から江戸時代の作であろうといわれている。「えんまでら」として知られ、六角閻魔堂（長生



明治初期に南湖の生徒十三名が定期試験に落第し、その責任を感じて割腹自殺した教師、若松幹男の墓もある。簡素なものだが、墓誌は同門だった

藤沢耕余塾長の小笠原薰（東陽）が認めている。

芭蕉の句碑が山門を入つてすぐ左、植え込みの前にある。句は高野山奥ノ院にある碑の拓本による複製である。松尾芭蕉が四四歳のときに高野山を訪れた時の句。芭蕉没後、後の義仲寺無名庵六世塙路沂風が建碑した。句の書は南画家池大雅（一七一三~七六）。

殿）に、坐像の閻魔大王像（台座に明和三（一七六六）年丙戌七月吉、仏師良運作の由緒書）を中心に、十王・司令・鬼卒・奪衣婆の諸像が安置されている（『ふるさとの寺と仏像』）。しかし、今回は拝観しなかつた。

日時 令和六年十一月十四日（土） 参加者 八名



歴史散歩

もご住職から電話を頂き、重ねてのご回應にお礼を申し上げます。

② 御靈神社 南湖一丁目

西運寺の南隣にある。鳥井戸集落の

氏神で、江戸時代は西運寺持。『新編相

模国風土記稿』に「義経の靈をまつ
る」とあるが、今は鎌倉権五郎景正も

祭られている。伝えでは源頼朝が相模
川の橋の完成祝に来た帰途、義経の亡
靈が出て、これに驚いた馬から落ちた
となっている。その義経の靈を慰める
ために建てられたという。(『ふるさとの

はせを翁／父母の しきりにこ
いし雉子 (きじ) の声
(裏) 昭和五十八年 (二九八
三) 十月／願主 十間坂重田次男
碑の高さ六一 (せん) 内六六 (せん) 厚
さ二七 (せん) 『ふるさとの歴史散歩』.



『茅ヶ崎の記念碑』

下見の時に、ご住職が、当日は
お茶を準備するからと黙ってください
さつたのだが、午前中に巡り終え
たいと申し上げた。本番の前日に

もご住職から電話を頂き、重ねてのご回應にお礼を申し上げま
す。

③ 西運寺 南湖一丁目

淨土宗 山号は御靈山淨祥院 開
山は念慈爰道上人 慶長元年 (一五
九六) 創立 (『風土記稿』)

金剛院の南西、東海道線の線路を
隔ててある。観音堂があり、今の本

堂は昭和二年 (一九二七) に改築したもの。南湖の「お十夜の
寺」として近隣に知られ、戦前・戦後行われていた。縁日 (十月
七・八・九日) には、見世物や露店が並び、農具市もあつて賑わ

つっていたそうである。

歌舞伎で知られる白浪五人男の一人、南郷力丸の供養塔といわ
れる「南無妙法蓮華經 南湖力丸靈」と刻まれた自然石の碑が觀
音堂の前に立っている。銘文によると、大正七年 (一九一八) 六
月十九日の造立である。(『ふるさとの歴史散歩』)

ここで、平野会長が「その相手の尻押は、富士見の間から向
うに見る、大磯小磯小田原かけ、生まれが漁夫に波の上」(力
丸のせりふ)を演じた。

④ 南湖の左富士とその碑 南湖一丁目 東海道 (国道一号) は、 西に向かって南湖の茶屋町から下町屋にかけて、右にカーブして

平野会長は、御靈神社は鎌倉周辺
では権五郎景正を祭神とするが、各
地もあり、戦いに敗れた人や不運
な人の怨霊を祭っていると説明し
た。



向かって右 南郷力丸供養碑



鳥井戸橋を渡る。晴れた日に橋の上に立つと、千の川の延長線上に富士山がある。即ち、東海道の右に見えていた富士を左に見ることになるので、江戸時代から名所の一つになっていた。安藤広重が描いた、東海道五十三次の浮世絵は数種類残つて、最初に発表した保永堂版（天保四年一八三三）が、最もよく知られている。安政二年（一八五五）に葛屋から出版された「五十三次名所図会七、藤沢、南湖の松原、左ふじ」は本市にも所蔵されている。松並木の間を左に富士、正面に大山を見ながら旅人のいく風景で、前方に見える屋並は下町屋だろうか。

『ふるさとの歴史散歩』

辻堂にある藤沢浮世絵館では、「南湖の左富士」をビデオで紹介している。

⑤ 弁慶塚 浜之郷八四〇

東海道（国道一号）から鶴嶺八幡宮の一つの鳥居をくぐり参道に入ったすぐ右手、人家の裏に塚がある。この塚は『風土記稿』・『東海道分間絵図』にも出ているが、いつの頃か（関東大震災の頃ともいう）消滅していたものを、地元の有志によつて昭和五十七年に新しく碑を建て、案内板を設けて整備復元した。碑文

は書家水越茅村氏の筆による。

先に御靈神社の所でも記したが、源頼朝は、建久九年（一九八）に、御家人稻毛重成が相模川に架けた橋の落成供養に参列し、その帰途にこの辺りで義経などの亡靈にあい、落馬して、それが元で翌年の正月に死んだと当市では伝えられている。そしてここに弁慶の靈を祭る塚が作られたとも。弁慶の首を葬ったところだとする説もある。『ふるさとの歴史散歩』

史実はともかく江戸時代の絵図にも載っている霊地である。参道には塚の名を刻んだ標柱があるが、塚は私有地に囲まれており、いささか見つけにくい。

参道をさらに北へ進み、鶴嶺八幡社との中間ぐらいに「鶴嶺参道歴史ひろば」があるので、そこに向かった。



⑥ 鶴嶺八幡宮の参道と歴史ひろば 浜之郷

鶴嶺八幡宮は、平安時代の長元三年（一二〇三〇）源頼義が下総の乱（平忠常の乱）を鎮定に向かう途中、懐島郷矢畠に源家の守護神石清水八幡宮を勧請して戦勝を祈願した（現 本社宮跡）のが最初という。その頼義、義家の時代から懐島景義の時代を経て、永禄（元亀年間）（一五五八～七三）に兵火にかかり、天正十八年（一五九〇）の小田原落城とともに社領を失い、残つた社殿等も荒廃に任された。



正保年間（一六四四～四七）、時の別当常光院の僧朝恵が復興を志し、地頭山岡氏の援助を得て社殿を再興した。続いて慶安二年（一六四九）に徳川家光から社領七石の御朱印（将軍が社領を確認すること）を得た。朝恵はこれを記念して、南大門馬場四百二十間（約七百六十四メートル）の左右に松を植えた。これが今に残る参道の松並木で、市史跡・天然記念物（昭和四十四年八月十五日指定）である。（『ふるさとの歴史散歩』）

この参道の中ほどに馬頭観音の石碑があり、そこが歴史広場となっている。説明看板の要点を次に転記しておく。

「馬頭観音は馬の供養や無病息災の祈願をこめて造立された。碑の真ん中に合掌した観音像、向かってその右側に「寛政七年三月乙卯三月日」、左側には「施主熊澤左四良」と刻銘されている。「寛政七年（一七九五）」の銘で、市域では古い馬頭観音である。

馬頭観音の多くは憤怒を示しているものが多い中、本像は比較的穏やかな形相をしている。現在は欠けてしまっているが、馬頭観音の特徴である馬の頭部が観音像の頭部に彫られていたらしい。像の大きさ 高さ四

一一セン、巾一九セン、奥行一二セン
「（ふるさと）発見博物館」
茅ヶ崎市教育委員会 ちがさき丸

⑦ 鎌倉古道と梅雲寺 下町屋 六五他



歴史広場のすぐ北に、参道を横切り西に向かう道があり、鎌倉古道と言われている。この道を進み東海道に出る少し手前に梅運寺がある。山号を町屋山といい、浄土宗の寺。慶長四年（一五九九）の建立。開山は広譽（『ふるさとの寺と仏像』）。

境内に祭られている「難除三宝荒神」は、江戸で開帳したほとどの信仰を集めていたといわれる。三宝荒神というのは、仏（仏陀）・法（仏陀の教え）・僧（仏教の修行者）の三宝を守護する神で、怒りの相を示し、不淨をきらい清浄な火を愛するといわれ、一般に竈（かまど）の神とされている。この荒神像は慈覚大師の作と伝えられている。大師、唐から帰朝の時、風波の難にあり、三宝荒神に祈願してその加護により難を逃れたので、そのお札に彫られたと伝えられている。（『ふるさとの歴史散歩』）

慈覚大師は平安時代の天台宗の僧円仁（七九四～八六四）のことで、延暦寺第三世座主。大師号はおくり名。最澄に師事し承和五年（八三八）に入唐して顯密（教）を学んで承和十四年（八四七）に帰朝した。入唐・帰朝の船旅では数度の危難にあった。

には嘉永二年銘（一八四九年）の厄除大権現の塔もある。



下町屋の鎮守 神明神社



境内
がある。

神社は東海道に面している。鳥居の横に沿革を記した看板が立っていて、祭神は天照大神、大山咋神（おおやまくいのかみ）とある。『風土記稿』には「神明宮、山王社、以上二社とも村の鎮守、柳島善福寺持」とある。また「平安時代の陰陽師の安倍晴明が東国へ下向の折、のどの渴きをいやした清水が湧き出ていたのを名付けて晴明井戸と称す」と彫られた碑

が
ある。
厄神大権現の塔
には嘉永二年銘（一八四九年）年銘の厄除大権現の塔もある。

石像があるとは知らなかつた、と話していた。梅運寺から東海道に出ると、ほぼ斜め向かいぐらいに神明神社がある。

⑧ 神明神社 下町屋一一六一一九

古の慶安四年（一六五二）銘の地蔵尊がある。そばには馬頭観音像や徳本名号塔などもある。



本堂裏手の墓地の一隅に市内最古の慶安四年（一六五二）銘の地蔵で、よく来るお寺なのに、こういう会員の平井さんは梅運寺の檀家で、よく来るお寺なのに、こういう

日と翌十二年一月十五日、関東地方を襲った大地震によつて、突然、橋脚が地上に姿を現して、人々を驚かせた。

⑨ 旧相模川橋脚

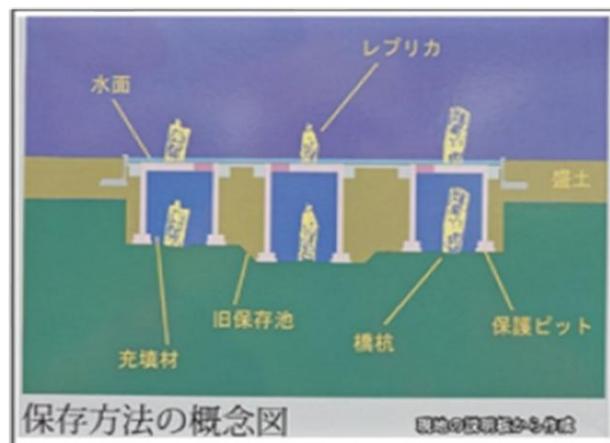


この辺りは長い間水田であったが大正十二年（一九三三）九月一日と翌十二年一月十五日、関東地方を襲った大地震によつて、突然、橋脚が地上に姿を現して、人々を驚かせた。

沼田頼輔により、この橋脚は『吾妻鏡』などが伝える「源頼朝の御家人、稻毛三郎重成が亡妻の追善供養のために相模川にかけた橋のもの」と考証された。

出現した橋脚は七本から十一本まで各説がある（県教委の案内板では十本）。保存のため水がたたえられているが、現在は七本が水面上に確認できる。現状の橋脚はイミテーションで、実物は保護保存のために地中に埋蔵されている。いずれも桧の丸材で、最大のものは周囲が一尺（経六〇センチメートル）ほどあり、橋幅は、およそ七尺と推定され、当時、全国でも数少ない大橋であったと考えられている。現在の相模川からは、約一・二キロ程東の位置で、これは旧相模川が、氾濫を繰り返しながらその流れを次第に西へ移動した

ところから西に少し行くと小出川にかかる下町屋橋の手前左に旧相模川橋脚がある。



ものといわれている。七百年の歴史の流れである。『ふるさとの歴史散歩』敷地の南側に、架橋の由来記「湘江古橋行」の碑が立つて、格調高い漢詩が刻まれている。

以上で今回の巡りはすべて終え、今宿からバスで茅ヶ崎駅に戻った。私は自転車なので先に駅に戻り、反省会をする有志をまたた。反省会は四人のみでしたが、和やかな会だった。中に平塚から

参加された関口さんもおられ、「これからも参加をお願いします」と話して終了した。

〔引用・参考文献〕

- ・『新編相模國風土記稿』
- ・『茅ヶ崎の記念碑』 塩原富雄著 平成三年三月茅ヶ崎文化資料館刊
- ・『ふるさとの歴史散歩』 塩原富雄著 昭和五十八年六月一十八日茅ヶ崎郷土会刊
- ・『ふらり散歩郷土再発見』初版 執筆塩原富雄 平成三十年三月改訂 茅ヶ崎市教育委員会刊
- ・『ふるさとの寺と仏像』昭和五十一年 茅ヶ崎郷土会刊
(画像は平野及び故坂井源一會員撮影。)

【参加の記】 「茅ヶ崎市内の東海道を訪ねるその③」に同行して

染谷倫人

鎌倉市にて月に一度の吟行会(複数の人が句を作るために戸外に岡かけ俳句を作り、その俳句を出し合い評価し合う集まり)に参加して約二年になります。上級者の方々の後を追い作句をしていますが、

怨靈を主神と祀る寒さかな

鎌倉市にて月に一度の吟行会(複数の人が句を作るために戸外に出かけ俳句を作り、その俳句を出し合い評価し合う集まり)に参加して約二年になります。上級者の方々の後を追い作句をしていますが、

西運寺の隣に御靈神社があり、小さな社でしたがライトアップの電球が並び地元の方たちに親しまれているなあとと思いました。



義経の靈を慰めるために建てられましたが、主神は、義経と鎌倉権五郎景正となっています。平野会長から「悪靈を神として奉り、靈を慰める」と説明がありました。たしかによい知恵だとは思いますが、本來恨みを買うようなことをすべきでなく、前述の句の「寒さ」を体の寒さと心の寒さを表現したつもりです。御靈神社以外にも、弁慶塚も義経の靈を慰めるために造られたと説明がありました。旧相模川の橋の完成祝いの帰路、義経の靈が現れ、頼朝が落馬・そして死に至つたので茅ヶ崎に靈を慰めものができたのもうなづけます。

実は茅ヶ崎の御靈神社そして弁慶塚を見て、鎌倉市二階堂にある永福寺(ようふくじ)跡を思い出しました。南北二〇〇メートル、東西七〇メートルの広大な土地に大伽藍三つの礎石が現存しています。多くの怨靈英靈をしづめ冥福を祈るために頼朝が建立しました。英靈はまだしも、身内や戦友に恨みを買うような戦のうえに鎌倉幕府が成立した悲しさを鎌倉でも茅ヶ崎でも感じた次第です。

冬の川流れの先に左富士

鳥井戸橋の上から下流を見ての景です。鶴嶺八幡社の参道の中

身近に感じた一瞬でした。



ほどに鶴嶺参道歴史ひろばがあります。その中に大正時代の東海道の写真があります。土の参道に松の木がちらほら。たしかにこれなら左富士がよく見えます。広重の「南湖の松原左ふじ」が理解できます。残念ながら現在はビルや家屋が立ち並び川の先にしか左富士は見られない。橋の袂に平野会長現役時代に作成にあたられた案内板があります。日頃はあまり気にかけていなかつたものがこうしてご案内をいただきながら見ることで

寒風に絞ひの笑みや六地蔵

梅雲寺の六地蔵を詠みました。六地蔵は六道(人間が死んだ後に行く、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天)における苦しみを救う六種類の地蔵菩薩との説明がありました。それなのでそれぞれに異なる持ち物を持ち微笑んでおられるのだそうです。

当日は暖かい日で寒風は吹いていませんでした。平野会長から次のよ



うな話を聞き前述の句が浮かびました。「この六地蔵は珍しい。首がコンクリートとかでつないでいない。廃仏毀釈の折に多くの六地蔵は首を切られた。」そういえばこの大きさの六地蔵は後からつなぎ直しているのをよく見かけます。この六地蔵さんたちはその嵐を逃れて原型をとどめて人間の救いために微笑んでいます」と感動を覚えました。

境内に銀杏落葉や町歩き

梅雲寺そして神明神社に大きな銀杏の木があり、銀杏落葉がひらりひらりと落ち、境内に落葉の絨毯ができていきました。一昨年の史跡文化財めぐりで訪ねた白峰寺の境内いっぱいに銀杏落葉があり、それを踏むのを躊躇することを思い出しました。参加した皆さんと別れてから松尾大神、三島大神も銀杏落葉が境内を覆っていました。この時期の町歩きに銀杏落葉は似合います。銀杏の木は水分が多く、火事に強いのでご神木になっていると



聞きました。残念ながら私の地元の諏訪神社では、二本の銀杏の木のうち一本が危険となり昨年秋に伐採、もう一本も決して健康ではないようです。その一因がどんどん焼きの煙ということです。今年からどんどん焼きは中止となりました。鎌倉鶴岡八幡宮の銀杏も何年か前に倒れました。今見ている風景を目で焼き付けてみたいのです。(画像は平野会員撮影・加工・編集子)

第三二回 史跡・文化財めぐり報告

山北町に河村城址を訪ねる

平野文明

行き乗車 国府津駅で御殿場線に乗換え—山北駅着10:15—
 (徒歩)—盛翁寺—河村城址—(昼食)—室生神社—山北駅—
 国府津駅—茅ヶ崎駅着(解散)

事前の勉強会 二月十八日(火) 於市立図書館 山本俊雄会員

日時 令和七年三月十五日(土) 一六人
 行程 茅ヶ崎駅8:50集合 駅発9:26発JR東海道線小田原



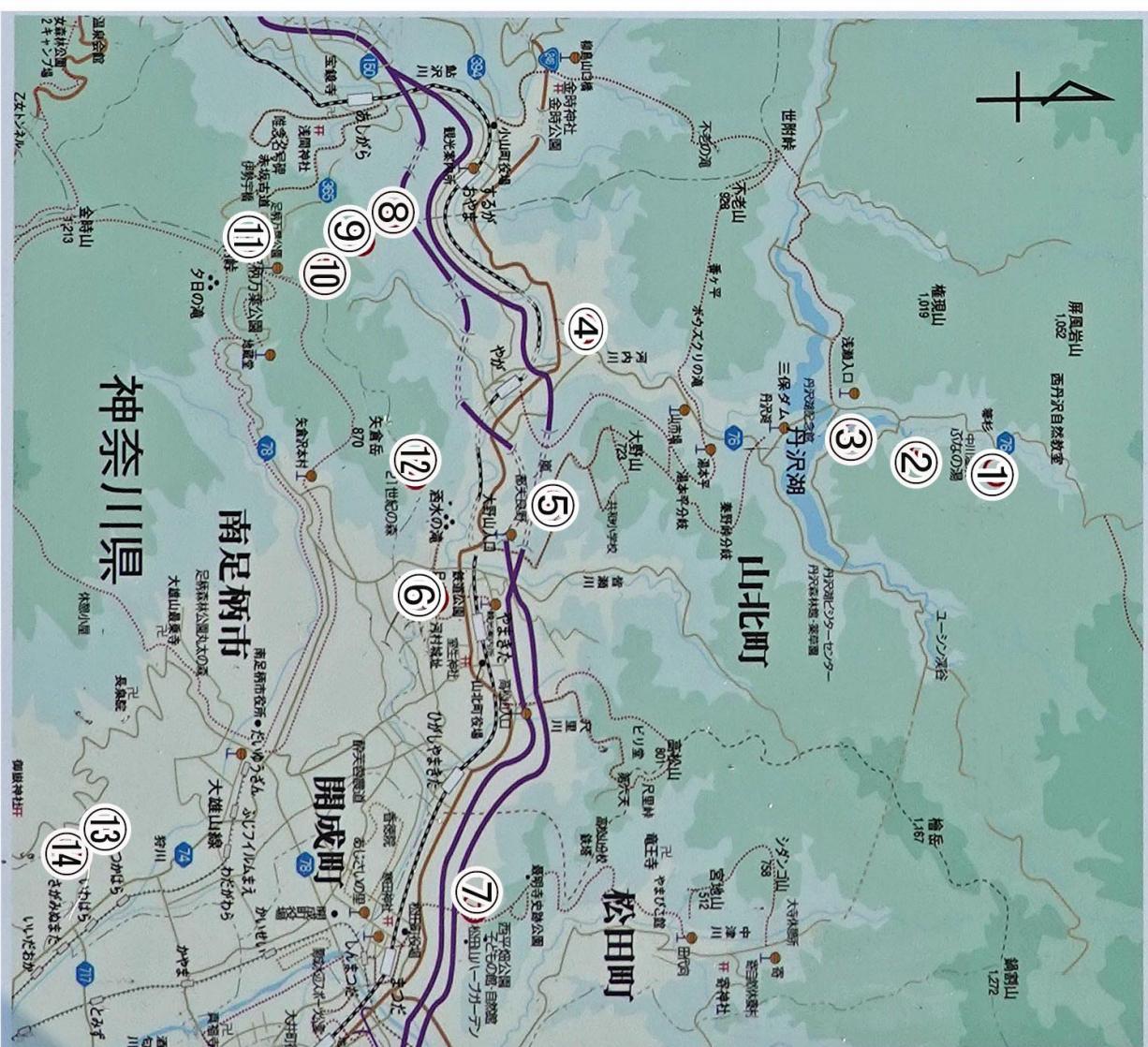
天気予報は午後雨となっていたが、朝の様子では持ちそ�だつた。いつものように八時五〇分までに茅ヶ崎駅改札前に集合した。
①山北駅 無人駅。下車するには先頭車両しか扉が開かないとアナウンスがあり、運転席のすぐ後ろに車掌と思われる職員がいて切符を回収している。ワンマン運転の電車なので運転士が車掌も兼ねているらしい。乗客はそこそこ満席だった。駅の改札を通る必要はなく、ホームの端から出入できるようにもなつていた。
駅開業は明治二十二年二月一日。御殿場まで急勾配のためにここで補助機関車をもう一台付け、貯炭、給水のため当時は大変賑わつたとのこと。駅弁の中川商店の「鮎すし」が名物だった。急行貨物は国府津駅に止まらなかつたため、小田原で獲れたブリは山北駅に運ばれ、関西に送られた。昭和九年十二月丹那トンネルが開通して東海道本線の路線が変わつたため大きな影響を受けた『足柄之文化』(三号・昭和五六 年 山北町地方史研究会刊・所収の藤井良晃「山北駅の今昔」による)。駅のそばに「鉄道公園」がありSLが置かれている。駅が賑わつていたころをしのんで作られた公園だろう。

ホームに「道了大薩埵」の石柱が立つてゐる。大正十年の建立で、丹那トンネル開通前である。大雄山最乗寺に参詣するにはこの駅で下車した。道了大薩埵は修験尊者で、没後最乗寺の守り神となつた。



②盛翁寺 山号は廣澤山。曹洞宗。天文元年(一五三三)、僧天光の開山、宝永五年(一七〇八)、所在地が水害にあつて現在地に移つたと伝える。ご本尊は釈迦如来(『新編相模之國風土記稿』「川村山北」の項)。境内に大きな石仏が二体祭られているが未調査。山門近くに巨大な六字名号塔があつた(本誌三頁に画像)。書体は茅ヶ崎にもある徳本塔(本誌三頁)に似てゐるが、徳本のものではない。表面は苔むして他の銘は読めない。裏面の文字は刻が浅く読みにくいが、その一部が「維時安政第五龍舎戌午〇〇(二文字読めない)佛正覺日」と読めたので安政五年(一八五八)の建立。裏にも「六字名号」の書き手の名は無いようだつた。
③河村城跡(県指定史跡) 城址は江戸時代の村の名では「川村山北」にある。盛翁寺の横に城跡に登る坂道が続く。沢沿いの登山道は直行すれば急坂だが、整備されていて、勾配の緩い曲り道も設けられていた。

登り着いた所は本城郭(読みは「ほんじょうくるわ」か?)。城の説明のモニユメントがあり、その文章の要点を次に転記する。
(1) この地は城山と呼ばれ、標高は約二二五メートル。相模、甲斐、駿河の境界で数多くの城塞群が築かれている。河村城は甲斐・駿河から足柄平野に至る交通の要衝に位置する。



＜周辺の小田原北条氏の出城＞

- 城址に立つ
説明板から作成

 - ①湯ノ沢城跡 ⑧丹土尾砦跡
 - ②中川城跡 ⑨阿弥陀尾砦跡
 - ③大仏城山 ⑩小檜尾砦跡
 - ④河村新城跡 ⑪足柄城跡
 - ⑤鐘ヶ塚砦跡 ⑫浜居場城跡
(県立山北つぶらの公園内)
 - ⑥河村城跡 ⑬岩原城跡
 - ⑦松田城跡 ⑭沼田城跡

(2) 河村城の築城は平安時代末期に秀郷流藤原氏の一族波多野遠義の二男河村秀高によって築かれたと伝えられる。秀高の子義秀は石橋山合戦で平方に属し、源頼朝に領地を没収されるが、建久元年（一一九〇）、鎌倉の鶴岡八幡宮での流鏑馬の妙技により、河村郷に復帰できた。今も行われている「室生神社流鏑馬」（町指定無形文化財）はこの故事に由来すると言われている。

(3) 南北朝時代、河村氏は南朝側の新田氏に協力した。北朝側の足利尊氏の鎌倉攻めのとき、河村秀国・秀経らは新田義興・脇屋義治とともに河村城に籠城した。正平七・八年（一二五二・五三）、畠山国清を主将とする足利尊氏軍と戦火を交え、南原の戦いで敗れ、新田、脇屋らは中川城を経て甲州に逃れたと『太平記』にある。

(4) 南原の戦い後、城は畠山国清、関東管領上杉憲実を経て大森氏の持城となつたと考えられ、その後相模に進出して来た小田原北条氏に受け継がれた。戦国時代、小田原北条氏は甲斐の武田氏との攻防から、前記の各城とともに小田原城の支城として河村城を重視し、補強した。その後、武田氏との間で周辺の諸城とともに争奪戦を繰り返した。天正十八年（一五九〇）豊臣秀吉の小田原征伐で落城、廃城になつたと考えられる。

(5) 城の規模・郭配置は、『風土記稿』及び堂山の鈴木友徳氏所蔵絵図に見ることができる。城跡は保存状態が良いため、現地では概略の位置が確認できる。現在使われている郭（くるわ）の名称は、絵図を参考にしている。

急な斜面と入り組んだ谷を生かした郭の配置がなされており、大きく三つの尾根を堀切によって郭としている。現在地（モニュメントのある場所）を本城郭とし、東の浅間山に連なる尾根に蔵





私たちは本城郭から東方向に進み、巨大な堀切（ほりきり）に架けられた木橋を渡つて蔵郭へ出て、その先の近藤郭との間の堀切にかけられたコンクリート橋を渡り大庭郭に進んだ。この、蔵郭と近藤郭との境の堀切には障子堀が姿を見せており、橋の上からも、下に降りて障子堀近くでも見ることができた。

大庭郭は広大な広さで、その東端に立てば東南方向に開成町から小田原市にかけて広がる市街地を遠望することができた。また、北を望めば、遠方の山腹で行われている第二東名の工事現場を望むことができた。その地点で昼食とした。

郭・近藤郭・大庭郭・同張り出し部を配し、張出部の南端を大手としている。本城郭から北へ伸びる尾根には小郭・茶白郭、西へ伸びる尾根には馬出し郭・西郭・北郭・同張り出し部が配されている。郭の周囲には水郭・帶郭が随所に見られ、本城郭と北郭の間に馬洗い場があり、小郭と茶白郭の間にお姫井戸の伝承地がある。

(6) 平成二年の本城郭及び堀切一ヶ所の試掘調査で、本城郭から柱穴と思われるピット六個が検出され、古錢（熙寧元宝..きねいぶんぽう）・染付陶磁器などの遺物が出土している。ピットの覆土（ふくど）にはいずれも焼土、炭化物が含まれており、根固め用と考えられる河原石が認められた。また、城の東端の大庭郭張り出し部東側の堀切は、幅約一〇メル・深さ約一一メルの箱薬研（はこげん）状の堀であること、蔵郭と近藤郭の間の堀切は、幅約三

○メル・深さ約一五メルあり、河村城最大の規模であることが確認された。平成四年の本城郭から茶白廓の間の堀切二ヶ所と小郭の発掘調査で、小郭両側の堀切はいずれも敵堀（うねぼり）の形態であり、本城郭側の堀切では八本、茶白郭側の堀切では五本の敵が検出された。また、小郭平坦面は一边約一五メルの三角形状を呈し、縁辺には地山を削り出して低い土壘（どり）が設けられており、南・北端にはつぶて石（つぶてせき）したと考えられる拳大ほどの河原石の溜場（たまりば）があった。

(7) 平成五年の河村城の根小屋とされる岸湯坂地区の土佐屋敷・秀清屋敷伝承地の試掘調査では、室町時代から戦国時代にかけての館跡と思われる溝が一部確認されており、当時すでに館・詰めの城の関係が成立していた可能性がある。（転記は以上）

昼食のあと、青木盛政会員が『吾妻鏡』の一節を朗読された。

石橋山合戦で大庭景親に付いた川村義秀は捕えられ、治承四年（一一八〇）一〇月二六日、頼朝方の御家人 大庭景能によつて斬罪されることになつていて。しかし景能は義秀を生かしておいた。其の後、建久元年（一一九〇）八月十六日、鶴岡八幡宮で行われた流鏑馬に、景能の配慮で、義秀は「見る者をして感ぜざるはなし」という技（わざ）を披露し頼朝を感心させた。青木さんはこの両日の場面を朗読されたのである。「吾妻鏡をここで誰か読む人ありませんか」の呼びかけに「私が読もう」と手を挙げる人はなか／＼あるものではないのです。

④室生神社へ



城址をあとにして盛翁寺まで戻り、川村山北の鎮守、室生神社に向かつた。古くからの道らしく、ところどころに石仏が祭つてある。道祖神や庚申塔は茅ヶ崎と変わらないが、「秋葉山大神」とある標石は茅ヶ崎では見ないものである。この辺りは、山北町が隣接する静岡県、その浜松市に鎮座する秋葉神社の信仰圏なのだろう。室生神社を訪ねたのは、河村義秀の時代から八百年続くと伝えられる流鏑馬神事（県指定無形文化財）が今も行われているからであ

る。『風土記稿』の「川村山

北」の項には「例祭九月廿九日、流鏑馬あり」とあるが、今は十一月三日を祭日としている。的を三本立てるのも吾妻鏡の記述に依つたものである。射手（いて）を町の人に行うのも珍しい。神社の祭神を『風土記稿』は「神體三座」とするがその神名は分からぬ。社殿の扁額に「天満天神宮／室生大明神／矢倉大明神」とあり、『風土記稿』に、天神と矢倉大神は「末社」と記されている。しかしこれらは祭神名ではない。境内にあるイチョウとぼだい樹は町指定の天然記念物になっている。

最後に

予定の時間を越して、天候も怪しくなつてきたので切り上げることにした。国道一四六号の下をくぐり、役場の前を通り駅を目



指した。ホームには登山の格好の人たちが、本数の少ない電車を待つて大勢あつまっていた。駅員のいない山北駅だが、結構乗客は多いじゃないかと思いながら電車に乗った。

雨の前に無事に解散できたのは参加者各位の心構えが良かつたからです。ありがとうございました。
 (令和七年四月三日記)
 (写真は、加藤幹雄・平野文明・前田照勝会員の撮影)



山北駅（無人駅）

【参加の記】 「山北町の河村城址を訪ねる」を再びめぐる

井出康夫

この二月に「丸ごと博物館の会」の会員となり、「茅ヶ崎郷土会」の「史跡文化財めぐり」に初めて参加させていただきました。河村城址をはじめ山北の由緒ある史跡名所を誌上で再びめぐります。感じたこと、思ったことを気の向くままに記しただけですが、こうした機会をいただきありがとうございます。

城をめざして

城に向かいます。SLが懐かしい「鉄道公園」を

いざ、山北へ
当日は雨の予報もあった中で、予定どおり河村城址に向かうことができました。日ごろの皆さまの善行のたまものです。

右手に見ながら小さな路を進み、りっぱな石灯籠が並ぶ参道に沿うと、曹洞宗「盛翁寺」が現れます。河村

さて、出発です。国府津乗り換えでのJR東海・御殿場線の降車は、SUICAは対応していないとのこと、久々の券売機にや戸惑いながら山北までの切符を購入しました。山北界隈に今も駿河との国境（くにざかい）を感じさせる一幕です。ちなみに二〇代のころの同僚、埼玉県川越出身でしたが、彼は学生時代まで小田原は静岡県伊豆と思っていたそうです。

山北駅に到着、「さくらの湯」という大浴場もあり、「桜」の名所であることはご案内のとおりです。三月に入り暖かい日が続きましたが、寒の戻りもあり残念ながら開花には早かつたようです。



江戸末期の木食僧の布教に依るものだらうが昔におおわれて詳しい事は分からぬ。

城廃城後の建立のようですが、境内には本堂のほか、なぜか小石を抱えた石仏、観音堂などが点在しています。境内手前の石塔の難解な書体の文字は「南無阿弥陀仏」とのこと、こうした路傍の文字が自由に読めれば楽しさが増しますが、浅学菲才の身ではとても及ばないと改めて痛感！

盛翁寺を後にすると、いよいよ城への道です。距離は短いですが、身をもつて『登』城を実感する急峻な視界が続きます。

登城道ラストに姿を

見せる「お姫井戸」、落城の時に城主の姫が井戸に身を投じた裏話（なぜ伝承ではなく裏話？）があるそうです。姫は井戸に身を投げ、若是密かに落ち延び再起を期す、落城、敗者の悲話としていつしか語られ、時には芝居、物語になるのが定番のようです。最近では、コミック・アニメ「逃げ上手の若君」で、北条時行（鎌倉幕府滅亡時の得宗北条高時の遺児、中先代の乱で鎌倉を一時奪還、その



後南朝に転じ、二〇代半ばで鎌倉龍ノ口において斬首が新たなヒーローになっています。

三国の要衝「河村城」

堀切を見ながら登りきると一気に視界が開けます。標高二三五メートル、いくつかの廓（くるわ）が連なる河村城が「河村城址歴史公園」として広がります。後北条時代の遺構ということですが、よく整備され、想像以上に平坦で広々としていました。

城の特徴である敵堀（うねぼり）・障子堀（しようじぼり）、堀切（ほりきり）に隔てられた廓と廓を結ぶ木橋など、防御上の工夫について平野会長から説明いただきました。本城廓にそびえる「河村城址碑（菅原正敬・徳富蘆峰書）」前で記念撮影、そしてコンクリート橋を渡り大庭廊（おおばくるわ）で昼食、同行の方から温かいお味噌汁をいただき改めて感謝申し上げます。

大庭廊から、足柄平野、相模湾を一望し、北側の麓を走る御殿場線、二四六号線など、古くは東海道にあたるのでしようか、これらを見下ろします。相模、駿河、甲斐の三国が交接する要衝として軍事上の大重要な拠点であったことが今も感じられます。北条氏康はこの城を活かして、武田信玄の侵攻を牽制し、上杉謙信の小田原包囲の状況を掌握と、マイ「大河」を勝手に創作、さらに遡れば、石橋山で敗れた頼朝が安房に向かう船を、平家方河村義秀の留守を預かる武将が眺めていたのではと妄想は広がります。

吾妻鏡と室生神社の流鏑馬

昼食後、茅ヶ崎ゆかりの懐島景義（大庭景能）が、斬罪とされた河村義秀を匿い、十年後に鶴岡八幡宮の流鏑馬での妙技により



義秀が赦された、吾妻鏡の一節を読みました。史料はなかなか難しいにもかかわらず、青木会員が朗読され、敬意を表します。大庭廓という名称も吾妻鏡の故事を意識しているのでしょうか。フイナーレは、この故事に基づく流鏑馬が八百年後の今も続く「室生神社」でです。ここでは鎌倉とは違い、地元の人が矢を射るそうです。秋の流鏑馬にはぜひ訪れたいたいと思

います。
茅ヶ崎ゆかりの故事が今も地域の人々に支えられ続いていることは素晴らしい、この物語にそつた山北の史跡名所めぐりは茅ヶ崎

を再認識する良い機会となり、大変有意義で楽しい一日でした。平野会長と事業を企画された山本会員、そして茅ヶ崎郷土会の皆さんに感謝です。

追記 懐島景義と芝居

当日は偶然にも、BS松竹東急で歌舞伎「梶原平二・脅石切（かじわらへいぞうほまれのいしきり、通称『石切梶原』）」が放送されました。主役は珍しく善玉に描かれる梶原景時、懐島景義の一人の大庭景親と侯野景久が敵役、何れも大庭御厨を開いた歌舞伎のスター・ヒーロー・鎌倉権五郎景正の係累です。場面として景義の登場はありませんが、何となく残念！

景義には古今無双の「弓の名手」源為朝と戦い生還した華々しさはありますが、負った傷により大庭党惣領を景親に譲り、頼朝旗挙げ後は幕府草創の裏方に徹し、その逸話は芝居狂言になりにくいと思われます。茅ヶ崎市史第四巻は「懐島景義の活躍」という一節を設け、鶴岡八幡宮への貢献や、河村義秀をはじめとした平家方武将の助命などを記していますが、和田合戦で景義一族が滅んだこともあります。物語には取り上げられない感があります。

鎌倉物の第一人者である永井路子は『相模のもののふたち』の中で「宿命の明暗を背負つて」と題し、大庭景親と懐島景義を描き景義に想いを寄せています。そして永井原作の大河ドラマ「草燃える」では名優花沢徳衛が景義を演じます。若武者河村義秀が「弓の名手」として映画になれば、景義に脚光が！

(画像の撮影は平野会員)

茅ヶ崎の郷土誌(史)で気ついた点・疑問点・問題点

この一六三号、ここまで編集してまいりましたところ、まるまる一頁の空白が生じました。さあ大変。何とかこのページを埋めるために、臨時の埋め草としてこのページを作りました。準備をする余裕の無い中で、とりあえず今回取り上げるのは次のことなりです。

石仏に穿うがたれた穴はなに?

本誌の一〇頁には御靈神社と西運寺が、二五頁には御靈神社が取り上げられています。その御靈神社に、頭の部分が三角形の石仏(供養塔)があり、三二一回史跡めぐりで見てきました。この塔は、下部三分の一くらいに穴が穿たれています。今回のテーマは、この穴が何のためにあるのかが分からぬという話です。

この石仏の頂部は屋根のように出っ張っています。その下の板状の平面に次の三行の文字(銘といふ)が刻まれています。

明暦元乙未(きのとひつじ)

南無阿弥陀仏

十月吉日

明暦元年は乙未の年で一六五五年、江戸時代の初期ですから、

市内の石仏の中では比較的古いものです。

「南無阿弥陀仏」は六字名号ともいい、意味は阿弥陀如来に帰依する(自分は、阿弥陀様によつて生かされており、全身全靈阿弥陀様を敬い、すべてを阿弥陀様に任せて生きる)という意味であります。そこでこの石仏を「六字名号塔」とも「念佛供養塔」ともいいます。三行目は、おそらくこの碑を建てた日取りでしょう。

(本誌編集子)



2024/11/6撮影

神仏習合していた江戸時代、御靈神社は浄土宗の西運寺によって管理されていたので、この石仏がここにあるのです。西運寺の境内には、このほかに宝永七年(一七一〇)と明和二年(一七六五)の念佛供養塔があります。これら三基の供養塔が五十五年を経て立てられているのは計画的だと思いますが、五十五年がどのような意味を持つものかは分かりません。

淨土宗あるいは浄土真宗では「南無阿弥陀仏」と唱えることをとても重要視します。特に浄土宗寺院では旧暦十月に十日間にわたり念佛を唱える「お十夜」の行事を行います。西運寺でも、かつてはお寺の近隣でサーク拉斯なども出るほどにぎわつたと伝えられています。この供養塔の三行目に「十月吉日」とあるのは、今年の令和七年から三七〇年昔に、すでにお十夜の法要が行われていたことを示しているのではないでしようか。

他の一基、一七一〇と一七六五年の念佛供養塔には穴はありません。ここに取り上げた明暦元年の供養塔に限らず、このような穴を持つ石仏を私はあまり見たことがありません。この穴は一体何のためにあけてあるのでしょうか。

これら三基の念佛供養塔は資料館叢書14『茅ヶ崎の石仏』2「茅ヶ崎地区』八一~八三頁に報告されています。しかし穴については触れてありません。

令和7年1月～3月の事業報告

茅ヶ崎市史4巻の輪読会 ○第4回1月7日午後市立図書館第2会議室○5回2月4日（前同）○6回3月4日（前同）

郷土会・丸ごとの会共催講座 ○1月21日「姥島と鳥帽子岩の話」平野文明 立図書館第1会議室○2月18日「鷹倉社寺考」と旧相模川橋脚」加藤幹雄（前同）

ミニゼン湘南主催講座「地域の歴史を学ぶ」 ○3月13日「茅ヶ崎の漁業」○3月20日「柳島村、南湖・須賀村との争論」平野文明

史跡・文化財めぐり ○312回「山北町の河村城址を訪ねる」

3月15日。本誌26頁に報告（事前学習は2月18日山本俊雄）

令和7年4月～6月の事業予定

茅ヶ崎市史4巻の輪読会 ○第7回4月1日（火）13～30図書館第2会議室○8回5月6日（前同）○9回6月3日（前同）

史跡・文化財めぐり

第313回「市内の東海道を歩く④今宿・中島地区」6月14日（土）8時50分までに駅改札前集合 午前中コース

総会 5月28日（水）13～30於市役所分庁舎5階A B会議室

—例年のように茅ヶ崎郷土芸能保存協会と合同で行います。

『郷土ちがさき』162号正誤表

4430頁 上段 後ろから2行目 確認しよう→確認しよう
10行目 鷹倉社寺稿→鷹倉社寺考

受贈図書

4443頁 上段 副会長 尾高→副会長尾高
(H.P掲載版は修正済)

藤沢地名の会々報113号（2023年2月1日発行）
藤沢地名の会々報114号（2024年2月1日発行）

藤沢地名の会々報115号（2024年10月1日発行）
藤沢地名の会々報116号（2025年2月1日発行）
ご送付いただきありがとうございます。

【編集後記】

いろいろな投稿をいただきました。会報は会員の皆さんからの積極的な参加によってできています。ありがとうございました。

卷頭の野田穂さんの「大岡越前守忠相日記」は、三一書房から刊行されている忠相の日記の中から必要な部分を選び、現代語訳されたものです。今後も続けられることを強く期待しています。

「風自由投稿欄」にも種々ご投稿頂きました。文章を書くことは敬遠される場合がありますが、人が本来持っている創作意欲の表れでもあります。チャレンジ。

史跡・文化財めぐりは、通算三百回を超える茅ヶ崎郷土会の主要事業です。訪ねた一ヶ所のめぐりを報告しました。これを読んで自分も行ってみようと思った人が参考になるよう編集しています。また、お二人から頂いた「参加の記」は、この事業を主催者とは違った目で見た、とてもありがたい記録です。